

## ぶらんこ

伊藤久昭

今日は少し早くから始めたので、開店の三十分も前に準備が完了した。恵一は店を出て、隣接している桜平東公園への少しの勾配を上った。開店前の少しの時間の日課のようになっている。天気の良い日の早朝の公園は、それなりに賑やかだ。三十年ほど前、桜平団地の開発と同じ時にこの公園ができた当時は、子供たちや子供を遊ばせる主婦たちで、一日中賑やかだった。しかし、いつの間にか子供たちの姿が少なくなり、今では大人たちがウォーキングやラジオ体操や太極拳にやってくるこの時間帯が、一日中で一番賑やかなのだ。南側の周回路を、ジャー

ジーでヘルメットの中学生が、三々五々自転車を通る。ジャングルジムの横では、ジョギング姿の年配の男性が、熱心に体操をしている。

「カフェのマスターも一年経ったな」

恵一は小さく口に出した。そして、片

方が撤去されて、一台だけ残されたぶらんこに腰を掛け、ゆっくり揺らした。

山形恵一は三十五歳で静子と結婚し、二年後誕生した女兒を「広美」と名付けた。静子はこの名前を「なんだか昔風ね」と最初は言っていたが、「この子が大人になる頃には、近頃のきらきらネームが廃れて、こんなのが却って新鮮になるのかもね」と、結局は賛成した。恵一が四十歳の時に、開発されて間もないこの桜平団地の建売を買った。恵一は市役所に勤め、静子は自転車で五分ほどの介護施設で介護士をしていたので、ローン返済の目途は立っていた。暫くは三人の平凡で安穩な生活が続いた。両親に見守られて、広美は優しい子に成長していった。

広美が小学校三年生の十月のことである。学校から帰宅した広美は、同級生のなおちゃんと遊ぶ約束をしたと言って、

すぐに東公園へ出かけた。その日は夜勤の当番で、まだ家にいた静子は、広美に帰宅時刻を約束させて、ポーチを肩に掛けて行く広美を見送った。

六時過ぎに市役所から帰宅した恵一は、広美が家にはいないのを少し不思議に思ったが、時々は下校後静子の勤め先へついて行き、帰宅した恵一が迎えに行く場合もあったので、メモを確かめに台所へ行った。しかし、台所の伝言板には、「広美はなおちゃんと公園へ行きました」という静子の伝言だけであった。不安になった恵一が、急いで静子に電話を掛けようとした時、市警察から電話が入った。広美が怪我をして、病院へ収容されたということであった。

広美は意識の戻らないまま、何とか一週間は持ち堪えたが、あっけなく他界した。以後の恵一たちの生活は、これまでとはまるで違ったものになった。広美を中心に、笑顔や笑いの絶えなかった家庭が、まるで別物になり、夫婦の会話も極端に少なくなった。更に静子のショックはあまりにも大きかった。静子はあの日公園へ行かせた自分を責め続け、宥める

恵一の言葉も全く耳に入らない。一時的には近所の話題になるほどの、半狂乱のようになり、これまでの静子からは全く想像できない言動が続いた。一年ほどして、精神的には漸く落ち着いてきたと思つた頃、静子に複数の内臓の疾患が現れた。過度で長期のストレスが大きな因子であることは、恵一にも想像できた。しかもその疾患はそれぞれが相当重篤なもので、広美が死亡してから約二年後、心筋梗塞で静子は他界した。

その後の恵一の生活は、また大きく変わった。ある期間は普段の生活が、まるで夢の中から旅先での仮の宿であるかのように落ち着かず、何事も余所余所しく浮足立っている感じがした。暫くして、漸く自分の置かれている現状が自覚できるようになったが、それは三十八年間勤めた市役所の、定年退職の時であつた。

この頃の恵一は、ある意味ではすつきりしていた。勿論、静子や広美のことが、尾を引いていなかったわけではないが、自分の今後について、現実の生活を考えなければならぬことに気付かされていった。平均寿命まで生きるとすれば、まだ

三十年近く、場合によつてはそれ以上あるかも知れない。市役所勤務に匹敵する程の長い年月を、これからの自分は一人で乗り越えなければならないのだ。

山形恵一は腰を掛けていたぶらんこから立ち上がり、店へ向かつた。既にモーニング・サービスの準備はできている。カーテンと窓を開け、「喫茶コスモス」の回転灯の付いた看板と、営業中の札を

玄関先に出せば客を迎えられる。店を持つた最初の頃は、開店の時刻が近付くと毎日のように、何かの準備を忘れているような、何処かに不備があるような不安に襲われたものだ。一年あまりで図々しくなったものだ、自分でもおかしくなった。

七時を過ぎると、女性二人と男性一人の客が喋りながら入つて来た。三人は口々に挨拶をして、慣れた仕草で椅子を引き、一番奥の大型テーブルに着いた。そこはグループや、混雑した時の相席を意識したテーブルで、十人ほどが利用できる。早朝はほとんど毎日、七・八人の男女のこのグループが、来店してここを占める。恵一は「モーニングですね」と誰にと

なく言つて、返答も待たずに準備を始めた。サイフォンに火を点け、厚切りの食パンを焼きながら、三つの器に、刻んでおいた野菜を盛りつける。この時間帯のこのグループは、コーヒーと食パン・ゆで卵とサラダの、喫茶コスモスのモーニング・サービスを朝食にしている、ほとんどが七十歳以上の人たちである。独居か家族と同居していても、ここでの友人との喋りながらの朝食を、一日の楽しみにしているのだ。更に二・三人ずつ男女が入つて来た。恵一は手を休めず、その度に申し訳程度に顔を上げて挨拶をした。恵一の動きはゆつくりしていたが、誰にも急がされることはなかった。

恵一は若い頃から、将来はカフェか居酒屋を経営してみたいと思つていた。勿論、それは半分以上諦めているような夢であつて、とても実現できるとは思つていなかった。ただ、卒業して以来続けた市役所勤務は、安定した公務員という、典型的な堅苦しいサラリーマン生活であつたので、不安定であつても、自分の責任範囲内では自由気ままな商人への憧れは、決して消えることがなかった。

六十歳で定年退職した時、本当に商売をするのであれば、今決心をしなければと思った。しかし、これまでの長いぬるま湯のような生活が身に沁み込んでいるのか、思い切ることができなかった。新しく商売をするとなると、当然、これまでの蓄えや退職金をはたかなければならない。静子がいない現在、誰にも反対はされないが、失敗して無一文という最悪の場合を考えると、恐ろしくて踏み出す勇気はなかった。

退職後二年間ほどは、テニス・ゴルフ・卓球・書写・絵画・陶芸等、運動系・文科系を問わず、いろいろなサークルや教室に入った。勤めていた時にやりたかったことを、すべてやり尽そうと思った。どれも最初は非常に楽しかったが、二年もすると、ほとんど残っていないかった。

また、今後の生きざまをじっくり考えようと、勇んで四国八十八か所への歩き遍路にも出たが、確信らしいものは全く得られず、二十三番を最後に、却って敗残者の様な心持になって帰った。

このころ偶然のように耳寄りの情報が入った。退職後入会したテニスクラブの

後や、時には早朝のモーニング・サービスに行っていた、桜平東公園横の「カフェ・カトレア」の店主夫妻と親しくなっていたが、夫妻がカフェを止めたいと思っていることを偶然知った。夫妻は恵一より十五・六歳年上で、この店を経営するまでに、既にカフェ経営の経験があり、「合わせる」と五十年以上になりますので、この辺りで隠居です」と、笑いながら話した。この話を聞いて、恵一は以前から抱いていた淡い夢が、急に現実味を帯びたように思った。翌日閉店後にカトレアを訪れ、店主夫妻に詳しい事情を聞き、自分の夢を率直に話した。

うすうす聞いてはいたが、この店と土地のオーナーは、五キロほど離れた所で農業をしている人物で、団地に組み込まれる自分の土地を提供する代わりに、公園に隣接するこのカフェの土地を得たのであった。オーナーはカフェをやりたいという息子の希望通りに店は建てたが、いざとなると息子は「音楽の勉強に行く」と言つて、開店直前に外国へ行ってしまった。暫く空き店舗になっていたのを、遠い親戚筋に当たる店主夫妻が借り受け、

団地の開発と同調して、ここで営業していたのであった。

「賃貸料については、固定資産税分と月額五万円ほどで借りられるのではないだろうか。いよいよとなれば、オーナーと話し合ってもらわなければなりません。自分たちとしては、器具や食器類をごく安く買い取ってもらえればそれで十分です」

恵一には願ってもない条件である。当初の資金は必要だが、普段の経費がその程度であれば、仮に客が少なくても、何年間かは経営ができる。商売の怖さは、失敗した時のリスクで、これが大きいと自分の将来が見えなくなってしまう。恵一には大きな賭けをする勇気はなかった。勿論、初期の投資にはある程度必要である。店の雰囲気も少々は変えたいし、調理器具や食器類は、ごく安く譲ってもらえたとしても、それなりの出費は必要である。しかし、小さいながらも自分の裁量で、現実の世間で勝負をするのだ。友達と競いあう、遊びのゴルフやテニスとは違う、真剣勝負の喜びが味わえるのだ。「自分にはカフェ経営の経験は全くあ

りません。商売の経験と言つても、学生時代のアルバイトくらいです。申し訳ありませんが、カフェ経営の勉強をしてきますので、半年間待つてもらえないでしょうか」

店主は、このカトレアで自分たちと一緒に働きながら、仕事を覚えることをしきりに勧めたが、恵一は断つた。市役所勤務は、マニュアル通りにこなして大過さなければ良い。自分らしさを出す必要がなく、また、その機会もない。カフェの経営は、恵一には冒険であつた。失敗をしても壊滅的な打撃にはならないとは思いつつも、これまでに経験のない相当な冒険であつた。気のいい店主夫妻の言うようにこの店で見習いをして、そのままずるずると経営者になるのでは、甘え過ぎてゐる。最初からそれでは、今後やって来るであろう困難が、乗り越えられないように思えた。恵一は、隣市のカフェに頼み込み、丁度半年間修行をした。

七時に開店して三十分もすると、奥のテーブルには、いつもの高齢者グループがほとんど集まり、同じことの繰り返し

も多いが、競うようにお喋りをしている。大声で笑つたり、時には喧嘩のような雰囲気の時もある。この雰囲気は、恵一の望んでいたもので、近所の人たちが気楽に集まり、時間を忘れて駄弁る喫茶店にしたいと思つていた。

恵一はカフェの経営に際して、客たちの会話には、なるべく関心を示さない態度を取ろうと思つた。勿論、自然に聞こえては来るが、決して自分から客たちの会話に入り込まないし、自分の意見や感想を言わないように心がけた。逆に、客との関係を親しくして、まるで家族のようになる経営方法もあるが、ここでは客の多くは団地の住人であるから、客たちはどこかで繋がりのあることが多い筈である。噂高く網目のような、その人間関係の中に巻き込まれたくはない。突然「マスターはどう思う」と、声がかかることがある。読んでいた本を置いて「何がですか」と、聞こえていなかったように敢えて問い直している。

土・日のモーニングの客は、いつもの高齢者のグループ以外にも結構あつたが、平日はグループ以外にはほとんど二・三

人である。モーニング・サービスが十一時に終了してから、閉店の五時までの時間帯の常連客は、団地外ではあるが、ここから五百メートルほど離れた、市営テニスコートのクラブの会員がやって来た。時々通り掛かりのドライバーやセールスマン、その日休暇をとつた団地のサラリーマンらしき客はあつたが、人数はごく少数である。恵一はこの店の経営で、利益が上げられるとは思つていなかった。何とか日々の収支が赤字にならないければ、ある程度の期間経営できて、それで十分だと思つていた。

市営コートは十六面ある。普段は個人やグループで利用し、また、定期的に市主催の講習会も開かれてゐる。コートの利用者は、桜平団地の住民が圧倒的に多い。平日はリタイアした男性や、子供に手がかからなくなった年代の主婦がほとんどで、休日は学生やサラリーマンが多い。恵一も退職直後から、友人と週二・三回、ゲームを楽しんでいた。

コートへ通い始めて暫くすると、主婦たちの人間関係の、複雑な面が見えてきた。育児から解放されて、自分の時間を

得られた主婦たちは、テニスで思いきり羽を伸ばそうとする。そこには自然に、競争心が生まれた。彼女らは気の合った者数名でグループを作り、それぞれ資格を持った者に、相当額の指導料を払ってコーチを受ける。そして、年間に数回ある女性たちの県や市や企業主催の大会で競い合う。中には勝敗にとらわれず、純粹にテニスを楽しむ女性もいたが、ほとんどの主婦たちは、この勝敗に異様なまでに情熱を燃やした。まず評判の良いコーチを奪い合う。謝礼は大きくなるが、週に何度もレッスンを受ける。ファッションまでも競い合う対象になった。彼女らの試合はダブルスのため、当然、強いパートナーと組みたいと思う。実力があつて氣立ての良い人をパートナーにしたい。それらしき人は引く手数多である。特に学生時代からやっていたような、若い新入りがあると、奪い合いは激しかった。ところがやっとできたペアーでも、長続きするとは限らない。二人のその後の上達に差が出てきたり、最初は氣を使ひあっていたペアーが、暫くすると互いに本音が出てきて、派手な別れ方をするこゝも

あつた。また、県の協会では、A・B・Cの三段階の階級を作り、年に一度の大会で優勝したペアーだけが昇級できた。このシステムによつて、上位のペアーは下位のペアーとは、練習試合でさえ嫌がつた。上位ペアーは勝つても自慢にならないし、万が一負ければ笑われ、何のメリットもない。恵一たちのように、ささやかな趣味としてやっている者には、馴染めない雰囲氣であつた。

喫茶コスモスの雰囲氣は殺風景ではあるが、開放的でもあつたので、じつくりとコーヒーを味わう店というより、氣樂に友達と駄弁る場所になつていた。客の助言で半年後から始めた、カレーライスが予想以上に人氣で、主婦たちの簡単な昼食として、重宝がられた。恵一が客たちの中へ全く立ち入らない、マスターになりきつていたので、長い時間駄弁つていても氣樂だつたのだ。市宮コートのテニスの連中はよくやつて来た。彼女らにとって最大の関心事は、試合に勝つことである。パートタイマーで得た金を、レッスンやファッションにつき込んでいる以上、試合に勝つてランクを上げ、名誉と

羨望の称賛を受けたい欲望に取りつかれた。喫茶コスモスで空いたコーヒーカップを前にして、彼女たちはよく喋つた。頻りに固有名詞が飛び出した。ペアーになつたり離れたたり、力がついてきたり衰えたり、練習試合で勝つた人負けたり、とにかく、刻々と変化するこのあたりのテニス界の情勢を、信頼できる数人の仲間と喋り、優越意識を膨らませる場合もあるが、往々にして、妬みや嫉みにまで行き着いた。

コスモスへ来るテニスの客には、それぞれ数名くらいの四つのグループがあつた。二人だけで来て何かひそひそ話す場合もあれば、時には、グループのメンバーが入れ替わることもあつた。グループ間は互いに牽制しあっているが、表面上は笑顔であいさつを交わし、互いに齒の浮くようなお世辭を言う。しかし、相手のグループが居なくなると、見事に豹変し、まるで敵同士のような言い方になり、数分前とは真逆の言葉が聞かれることもあつた。恐らく、テニスに取りつかれた彼女たちは、自分でも氣付かぬうちに、テニスによつて人間性まで変えられてしまふ



のであると、恵一には思われた。

恵一は、その渦に巻き込まれてはいけ  
ないと思っていたが、実際には狭い店内  
に飛び交う会話で、入り組んだグルー  
プ関係や、もつれた人間関係を、相当詳  
しく知ってしまった。もしかしたら、  
この辺りの主婦たちのテニス界のことは、  
案外自分が一番よく知っているのかも知  
れないと思うこともあった。

一か月ほど前、カウンターの途中でぼん  
やり読書をしていた恵一は、思わず彼女  
らの会話に聞き耳を立てた。客は一グルー  
プの五人だけだったので、彼女らの声も  
大きい。

「のぶよさん知っていた。あの中田さ  
んね、怪我をして今度の大会に出られな  
いらしいの。ペアのさなえさん誰と組  
むのかしら」

「さなえ・中田ペアはね、最近仲が  
うまいっていい噂があったのよ。案  
外さなえさんには好都合かも。この前出  
なかったボレーのうまいゆりさんと組め  
るのだから。ペアとしての力はすごく  
アップするわ。相当勝ち進むのじゃない  
けど中田さんはどうしてそんな大きな

怪我をしたの」

「散歩させていた犬が急に走り出して、  
引きずられて側溝へ落ちたらしいの。親  
戚から預かった大型犬だつて。慣れてい  
なかったのね、きつと」

「私も、もう二十年ほど前だけど、実  
家の兄たちが旅行をするので、十日間ほ  
ど真つ黒な大型犬を預かったの。散歩が  
好きな犬で、最初は少し心配だったが、  
普段から私に懐いていて、大人しい性格  
だったので、散歩がすごく楽しかったわ。  
散歩をさせていると、目立つ犬なので、  
小学生のいたずら坊主たちが、興味を持  
て離れた所から恐る恐る見ているの。触  
らせてあげると言つて近付くと、わーと  
言つて逃げて行くの。面白かったわ」

恵一は信代の言葉で、突然目が覚めた  
ような気持になった。そして、八歳の広  
美の顔が浮かんた。信代はこのグルー  
プの中心的存在であつた。年齢がテニスの  
実力か、それとも発言力の強さで決まる  
のかは分からないが、どのグループにも  
中心となつて引つ張っている女性がいた。  
恵一はこのグループの中心はこの女性で、  
「のぶよ」と呼ばれていることは知つて

いた。しかし、よくある名前であり、静  
子のメモにあつた、あの「のぶよ」と結  
びつけることは考えたことがなかった。  
恵一はその後の信代の言葉に注目してい  
たが、彼女らの話題はすぐテニスに戻つた。

広美の死亡に至つた事故について、恵  
一が当時警察から聞いたのは、桜平東公  
園の北側の階段で、足を踏み外して転落  
したということであつた。公園への出入  
り口は西と南と北側にあつたが、公園の  
周囲は桜の木と背の低いサツキやツツジ  
が植えられていたので、実際にはどこか  
らでも出入りができた。しかし、小さな  
子供たちは、学校で指導され看板の注意  
書き通り、正規の出入り口を利用してい  
る。南と西口はだらだらした勾配で、周  
回路に繋がっているが、北側だけは団地  
の境界でもあつて、低い山を切り開いた  
関係で、公園より低い所を県道が通つて  
いる。公園の北口から出る場合には、一  
段ずつの段差は小さいが二十段ほどの、  
急なコンクリートの階段を下りなければ  
ならない。広美はそこで足を踏み外して  
転落し、県道横の敷石の歩道へ横たわつ

たのだ。ベルトが千切れ、大きな擦り傷の付いたボーチを静子に渡しながら、警官は機械的に説明した。一応、警察も確認のために、その頃公園にいた大人たちを探して聞いて回ったが、疑問を挟む余地は全くなく、不注意による転落事故と結論付けられた。運悪く階段に積もった落ち葉が前夜の雨でぬれていたため、それを踏んで滑ったのであらうと言うのであった。

恵一は事故の一報を受けた瞬間、不思議に思ったことがあった。広美の入院中や静子もがき苦しんでいる時には、ほとんど失念していたが、静子まで他界して、いよいよこれからは自分一人で何十年間を生きていくことになると思った時、ふと最初の最も単純な疑問が、ちょうど地震で突然思わぬ所に現れる流動化現象のように、現れて消えなかった。

「広美はなぜ北口から帰ろうとしたのか」家は公園の南東に当たる。当然南口から出ようとする筈で、そのまま周回路を通れば、五分で帰宅ができる。わざわざ反対側で、階段のある北口から出る必要は全くない。遊びに出た時の帰宅時刻は、

五時に団地の有線で流される「夕焼け小焼け」と、決めてあったので、当然、広美はそれを守ろうとしたであらう。それではどうして、わざわざ時間のかかる北口から帰ろうとしたのか。西口や南口の広いだらだら坂と違って、両側に雑草の生えた、時間的にはやや薄暗く感じたであらう、細くて急な階段の北口を、何故選んだのか。何か理由があるはずだが、恵一には思い浮かばなかった。

恵一が再度この疑問を思い起こしたのは、半年ほど前である。或る日、身の回りを少し整理しようと思って、これまで手を付けられなかった、静子の手回り品や化粧品や衣類などを分別していた時である。鏡台から出てきた、静子が愛用していたボーチを開けると、小さな手帳が入っていた。葉を挟んだページには小さく丁寧な文字で、簡条書き風に次のことが書かれていた。

十一年六月三日・水上直美・北口  
公園南口前道路に大きな黒い犬・こわいかいどうのぶよ？  
ニューファンドランド？

他のページも見したが、関係するような

メモは見当たらなかった。

これを読んだ恵一には、行間を推測してほとんど繋ぐことができると思った。これは広美の事故に付いてのメモに間違いない。ある程度落ち着きを取り戻した頃、静子も当日の広美の行動を、不思議に思ったのであらう、一人で尋ね回り、これだけのことを調べたのだ。最初の月日は聞き取った日で、水上直美とは、広美と最も親しかった「なおちゃん」で、当日も一緒に遊んでいた子である。恵一自身も本人や両親と面識があった。静子が問い質した頃は、なおちゃんはまだ小さいので、うまく話せなかったかも知れないが、当日の事情を一番よく知っていた筈である。メモから推測すると、なおちゃんの話では、公園南口前の道路に大きな黒い怖い犬がいたので。当然飼い主が散歩をさせていたのであらう。そして、その犬の飼い主は、恐らく「かいどうのぶよ」と言う人物なのであらう。直美が飼い主の名前を知っている筈がないので、静子が何日もかけて聞いて回った末に、やっとたどり着いた名前なのだ。

広美は「夕焼け小焼け」が鳴ったので、

なおちゃんとバイバイをして帰ろうとした。ちやうどその時南口の前の道路に、黒くて大きな恐ろしい犬がいたのだ。暫くは迷ったであろうが、広美は北口から帰ることを選んだ。遠回りで時間が掛かるので、焦りもあつたであろう、とにかく階段から簡単に転げ落ち、そして、あつてなく命を落としたのだ。

この時の恵一には、ニューフアンドランドという最後の一行の意味が分からず、かいどうのぶよは出張か旅行でカナダへ出かけていて、静子の調査が行き詰まってしまったと結論付けた。

恵一が、広美を失くした悲しみと、心身共に打ちひしがれた静子を心配しながら、市役所で勤務をしていたその時に、家に居た静子はこれだけのことを調べていたのだ。事故の直後に聞き込みをした警察でさえできなかったことを、約一年後に静子はこれだけのことを判明させたのだ。団地や近郊を、自転車で涙を拭きながら、どれ程聞き回ったことであつたろう。

恵一には信代が思い出し笑いをしながら言つた「二十年ほど前、十日ほど大型

の黒い犬を預かつた。子供たちの怖がるのが面白かつた」という言葉が頭に沁みついた。もしかしたら静子のメモにある、「かいどうのぶよ」と、毎日のように店に皆を引き連れて来ている「のぶよさん」とは、同一人物かも知れない。ただ彼女らはほとんど名字では呼ばず、互いに名前だけで呼び合っているのだ、恵一が彼女らの会話を注意して聞いていても、なかなか名字は出てこなかつた。直接メンバーの一人に聞きたかつたが、普段知らぬ素振りをしてゐる恵一が、突然彼女の名字を問うことは、余りにも不自然でできない。ニューフアンドランドについては、それが犬種の名前であることを、週刊誌のグラビアに、女優と愛犬が写つていた記事で知つた。やはり黒い大型犬であつた。

モーニング・サービスを朝食にしている高齢者のグループは、会話の内容が至つて平和である。毎日のように、病氣・病院・体の不調の話題が繰り返され、時には、病氣の重い比べをしたり、いかに自分の方が不運なのかということ、喧嘩のように言い合うこともあつた。しかし、

それが終わると、後には何も残らない。勝ちも負けも、善も悪も、正も否も何もなかつた。昔からある舅・姑の嫁いびりも、別居している現実では全く迫力が無い。彼や彼女らは、毎朝、三百円で得られる、コスモスでの、朝食と会話の場を楽しんでゐた。ほんの十年ほど前まではテニスをやつてゐた人たちが、今では、ゲートボールやグラウンドゴルフをやり、内科・眼科・整形・歯科に通い、早くぼつくり逝きたいと言いつつ、年金生活をそれなりに楽しんでゐるのだ。

テレビ番組もよく話題になつた。水戸黄門のドラマなどは、全員が毎日見てゐるらしく、ストーリーや配役の細部にわたつて、議論が尽きない。ニュース番組も話題になる。大きなニュースの場合は、連日持ち出された。コメンテーターにも詳しく、名前を上げて、最近考え方がおかしくなつたとの発言に、みんなの意見が集中した。

「最近都会では、普通の住宅街で簡単に、麻薬の売買がされているらしいね」よくあるワイドショーを見たのであらう、ひとりの女性が言い出した。すると、



これも多くが見ていたらしく、あちらこちらから言葉が飛び出した。

「大麻なんて単なる麻だつて」

「もしかしら、案外この団地にも入っているかもよ」

「子供の虐待も多いね。物心の付いた子を死ぬほど痛めつけるなんて、今の親は何を考えているのかしら」

話題は連想ゲームのように飛び回り、いつも完結することはない。決して結論が出たわけではないが、時間が来ると、来た時と同じような雰囲気ですべて行つた。

信代の名字が分かるまでには、割合時間が掛かった。彼女らは決して名字では呼ばないのだ。しかし、ある日それは偶然判明した。信代のグループが帰った後、片付けていると、テーブルの下に棚に、昨日のテニス大会の要綱が忘れてあつた。先ほどまで六人が競うように、対戦相手や組み合わせを作った役員を、批判していたその要綱である。恵一は少し気が咎めたが、開いてみた。二枚目の組み合わせ表には「五海道信代」という文字があつた。そして、田辺初美とのペアで、三

回戦まで勝ち進んだ印が付けてあつた。静子のメモにあつた「かいどうのぶよ」

は恐らくこの表の「五海道信代」なのだ。名字の一字違いは、訪ね回つた静子が聞き違えたか、尋ねた相手の記憶違いなのだ。非常に珍しい名字なので、恵一には確信が持てた。店に来る信代が、初美という新人で、学生時代に相当経験した若い実力者をグループに引つ張り、信代とペアを組んで大会に出ることは、半月程前からの彼女たちの会話に度々出ていた。恵一は、信代の力の強さを、思い知らされたように思ったものだ。恵一には信代の住所が、桜平団地のどのあたりかということは、普段の彼女たちの会話から、ある程度予想ができた。

或る日恵一は、それらしき辺りを自転車ですら回つた。そして「五海道誠也・信代」の、表札を見つけた。五海道家は東公園の南西に当たる。道路から四五段の斜めの階段の上に門扉があり、上がると小さな庭があつて、その先が玄関になつていて、シャッターが下りていた。この辺りに多い、高低差を利用した瀟洒な作

りであつた。恵一は自転車でゆつくり二往復した。平日の昼下がり、五海道家だけではなく、このあたり一帯が静まり返っている。それは無機質な静けさにも感じられた。無限と思える生の喜びを、ほとんど経験することなく八歳で亡くなつた広美と、そのことの全てがまるで自分の責任であるかのように、悔やみ抜いて他界した静子を思うと、五海道信代に対する憎しみは、恵一の心の全てを占めた。

これから自分は何をなすべきかという自問には、答えは見つかつていない。恐らく静子も悩んだであろう。五海道信代には、万人が認められるような、決定的な罪状が見つからないのだ。大きな怖い犬がそこに居なければ、広美が死ななかつたことは間違いない。しかし、「あなたが大きな犬を散歩させていたので、怖がったうちの娘は階段から落ちて死にました」これを信代に言つたとして、どうなるのであろう。

静子の努力でこれだけ分かつた以上、二人の遺志を継ぐ意味でも、この悔しさを晴らすために、生きている自分は何かなをしなければならぬ。何をどうすれば

よいのだろう。その時以来結論が出ないまま、恵一は絶えず責められているような日々を過ごした。

信代から「お願いがあるので、閉店後伺います」と伝言があった。グループでお喋りをした帰り際、信代が一人だけ少し遅れたようなタイミングで恵一に言った。片付けの終わった六時頃、信代はやって来た。昼間客として来た時とは違って緊張していた。

「実はお願いがあるのですが、息子の孝にこちらのお店で、アルバイトをさせてもらえないでしょうか。大変恥ずかしい話ですが、大学へ入学して一週間ほどした頃から、急に引きこもりになり、二年近く休学しています。最近少し打ち解けてきて、こちら様でアルバイトをしたいと申しましたので、誠に勝手ですがお願いに上がりました」

恵一には全く予想外の話である。よりにもよって、憎しみの鉄槌を下そうとすら思っている五海道信代から、病気の息子のリハビリを頼まれるなんて、この時の恵一には神の悪戯とさえ思われた。

「大学生にもなって、このようなことを親が頼みにくるなんて、おかしく思われるかもしれませんが、とにかく引つ込み思案で困っています。ただ、常識的な行動はとれると思いますのでお願いします」

恵一はしばらく考えて、場合によって引き受けてもよいと思った。いくら客の少ない店とはいえ、毎日、一日中、一人だけでやり繰りするのには、精神的にも身体的にも非常に疲れる。幸い客のほとんどが常連なので、何とかなっているが、余裕は全くない。

「あなたもご存じのように、うちはお客さんが少ないので、あまり高い時給は出せません。ランチにカレーライスを出して、それで何とか店の維持ができている状態です。孝君と一度話したいので、明日にでも来るように言ってください」

翌日、孝が自転車で行って来た。引きこもりで引つ込み思案と言っていたので、どんな青年かと思っていたが、恵一にはよほど好感の持てる部類の青年であった。色々話していると、孝本人がアルバイトを頼みに行くと言っていたのを、母親がそれを制してやって来たとのこと、恵

一には、普段の信代からそれはあり得ることだと思った。恵一は仕事の内容・時給を提示し、勤務時間・回数は、孝の希望を入れて決定した。

孝が勤務を始めて暫くは、恵一も少し心配していた。客のほとんどが母親の知人友人であり、しかも、競い合ったり妬みあつたりしている主婦たちも多い。クーヒーを持ってきたウェーターが、信代の息子であることはすぐ話題になり、非常に興味を持たれるであろう。二年間も引きこもっていた孝は、果たして、どう反応しどう対応するのであろう。もう少しまぐやれなければ、すぐにでも断るつもりでいた。五海道信代の息子でもあるので、冷淡になるつもりであった。

恵一の心配は杞憂であった。物珍しそうに声を掛けたり、質問をしってくる主婦たちに対し、孝は笑顔を絶やさず堂々と適度に答え適度に受け流していた。その態度は客としてやって来た母親に対して、全く変わらなかつた。孝はよく気が付き動いた。しかも積極的だったので、恵一にも客にも印象が良かった。

客への接待が一段落したり、客が誰も

いない時には、恵一はカウンターの途中で、孝はカウンターの一番端のスツールで、それぞれ読書をしていた。絶えずスマホをいじくっている年頃の若者が、読書をしているというだけでも、恵一には新鮮であった。

広美を死に追いやり、静子を死に追いつめた憎き信代の息子ではあるが、孝と言う青年が、なかなかの人物であることは否めない。

「カフェのウェーターに守秘義務があるわけではないが、カフェはいろいろな事情を抱えた人たちが、一杯の珈琲で暫しの癒しを求める所です。窮した人が思わず本性を現すことはあります。店での情報は他言無用で通してください。それは店の信用と君の人間性の評価に係ることです」

雇用に際しての、孝への注文であったが、恵一の望んでいた以上に、孝は趣旨を理解し実行した。それはそのまま、孝の恵一に対する信頼にもなったようである。客のいない店で二人がぼんやりしている時、聞かれるともなく、孝は自分の家庭を話した。大学へ入学してすぐ引

きこもってしまった孝には、周囲に本心を繕わずに話せる人間はいなかった。誰かに聞いてもらいたい状態が、一気に堰を切った。話し始めたその時の孝は、恵一には人が変わったようにすら感じられた。

「母も言っていないと思いますが、僕は一人息子として、大切に育てられました。父は外国航路の船員で時々しか帰らないため、母は全てをぼくに注ぎました。中学・高校・大学と年を経て、僕には母の干渉が疎ましくなりましたが、同時に母の気持ちも理解できるようになり、真面目で素直な息子というポーズをとり続けていました。」

それは久しぶりに父が帰宅する日で、僕の大学合格祝いをする事になりました。母は張り切って好物のご馳走を作るために、僕を誘ってスーパーへ行きました。その日の食卓は、母の自慢料理とはしゃいだ声で満ちていました。父もそれなりに嬉しそうでした。その時母が、ワイン一本とグラス三個をテーブルに置きました。今日はお祝いだから少し高級なのよと言って、三人で乾杯をして夕食が始まりました。喋るのはほとんど母でした。

ワインを飲み食事をしながら、僕は大きなことに気が付きました。母と僕は一緒にスーパーへ買い物に行き、カートに二個の籠を乗せ、僕がそれを押して母は商品をそこへ入れていました。酒類売り場で父のビールを買っている時、僕は頼まれて、カートを離れて練り辛子を取りに行きました。戻ってきてさらにいろいろ買い物を入れ、カートを押して一緒にレジへ行きました。清算する様子を母と僕は一緒に見ていましたが、その時には絶対ワインはなかったのです。買った筈のないワインがどうして食卓へ出て来たのか。想像するだけで、ぼくは忌まわしく恐ろしい気持ちになりました。スーパーでのあの場面は正確に思い出せます。あの時母は厚手の生地の手拭バッグを、絶えず脇に抱えるようにしていました。

悪びれることなくぼくの合格祝いとはしゃいでいる母が、僕にはとてつもない悪人のように思われました。このような母に、従順な息子として育てられたことが、非常に腹立たしく思われました。翌日台所のごみ箱に、無造作に捨てられてあるあの時のシートを見て、残念なが

ら、僕は確信せざるを得なくなりました」  
恵一には孝が泣いているように思われた。

「父が家に居た二・三日は、僕は家族の一員としての体裁を何とか保っていたが、母と二人きりになると、同じ家に居ることが非常に苦痛になりました。僕の急激な変化の原因を、母はどう思ったかわかりません。会話はもちろん全く顔を合わせられません。それでも数日は大学へも行きましたが、結局自室に引きこもってしまいました。それ以来、正面から母に確認しようと、何度思ったかしれませんが、母が認めた場合でも認めなかった場合でも、余りにも恐ろしくてできませんでした。そして、真実が白日に晒された時は、家族が完全に崩壊する時だと思っています」

孝の言葉は続いた。恵一という他人を全く意識していなかった。

「母は自分勝手で気が強く、リーダー的に振る舞っていますが、実際には気の弱い人間で、それは一生懸命虚勢を張っている姿なのです。従順に従っていたばかりにあからさまに拒否されていることは、たまらなく苦痛なようです。最近では、

部屋に引きこもり、眼を合わそうとしな  
い僕を恐れています」

恵一は訴えかけるような孝が、不憫に思えた。孝がここまで家族のことを暴露した相手は、今の自分が初めてではないだろうか。誰かに向かつて吐露しなければ、若い孝の胸の痛みは飽和状態だったのだ。恵一は、もし、ある場面・ある状況になったら「君の母親に、私の八歳の娘は殺された」と、言い放つことをずっと考えていたが、この時にはその気持ち

は頭の片隅にも現れなかった。

その時、サラリーマン風の二人の男性客が入って来た。孝は見事なほど、瞬時にウエーターになって応待した。結局、信代と孝の経緯については、恵一に疑問は残ったが、それ以上は聞く機会がなかった。

恵一には孝の暴露した内容が、余りにも思いもよらないものであったので、以後は信代やグループのメンバーの言動に、知らず知らず注目していた。

毎朝来る高齢者グループの多くは、十年ほど前までは、現在の主婦のグループと一緒にテニスをしていた、いわば先輩たちなので、現在の主婦グループの若い

ころについてはよく知っていた。信代のような目立つ主婦や、各グループのリーダー的存在の人物は、高齢者の朝食会でも、時々話題の人であった。

「信代さんこの頃少し変なのよ」

一人の女性の言った言葉を、恵一ははつきり捉えた。以前なら聞き過ごしたと思われるが、この時の恵一には、「のぶよ」と言う音は特別に響いた。

孝は実によく動いた。可愛がられて育ち、年頃になって引きこもりになり、社会から隔絶した生活を何年間か過ごした、そんな青年にはとても思えなかった。母親が何人かの主婦を引き連れて入店した。孝はにこにこしながらマニュアル通りに注文を取った。それが余りにもスムーズなので、思わず信代を窺ったほどであった。

恵一に残った疑問の一つは、孝が何故「喫茶コスモス」をアルバイト先に選んだのかということである。孝は以前一度客として来店したことはあったらしいが、ここは、顔も合わせたくない母親の根城のような喫茶店なのだ。一番行きたくない店の筈なのだ。あれ以来孝が恵

一にまとまった話をする機会はあるなかつた。話し出そうとすると客が来るという、そんな場面が何度かあった。

「孝君、何か話したいことがあれば、閉店後聞いてあげるよ。私で良ければ」

こんな軽い言葉に乗って来るとは思えなかつたが、今晩伺いますと言つて、孝は嬉しそうに帰つて行つた。

やつて来た孝と、カーテンを閉めて減灯した店のテーブルで向き合つた。恵一はこの店を選んだ理由を聞くと思つていたが、その間もなく、孝は喋りだした。

「実は二か月ほど前、変な投書がありました。毎朝門の新聞受けまで朝刊を取りに行くのが僕の日課ですが、その日新聞の下に一枚のメモが入っていました。それには『ノブヨサンハマヤクワカッテイル』と、直線ばかりのカタカナで書かれていました」

孝はここまで喋ると、息をついでコップの水を飲んだ。恵一には、孝は言いたいことの核心部を、全て言つてしまったように思えた。思いもよらない内容で、瞬間的に、恵一には悪質な悪戯だろうと思われた。信代の普段の振る舞いを、快

く思つていない者の嫌がらせであろうと思われた。しかし、孝は真剣であつた。

勿論、半信半疑ではあるが、ワインのこともあるので母親が信じられず、完全に否定ができない。孝からは次の言葉がなかなか出てこなかつた。恵一は孝が自分の言葉 wait していると思つた。否定して貰いたいに違ひないと思つた。

「お母さんはね、絶対そんな事をしていないと思うよ。自分は客の話は聞かないようにしているけれど、それでも聞かえてくるし、毎日聞かされていると、客の人間性や客同士の人間関係も分かってくるものだよ。お母さんは気丈に振る舞いリーダー的存在だけれど、そんなことまでしているとは思えない。それより、他のグループから、恨まれたり妬まれたりして、君の家族を乱そうとする、悪質な嫌がらせだと思ふね」

孝は恵一の言葉で、安堵が直ぐに表情に表れた。恵一も自分の言つたことに絶対的な自信を持っていたわけではない。ただ、孝を慰めるためではなく、その時思つたままを言つたのであり、間違つていないと思つている。

「僕が『コスモス』でアルバイトをした、といひ出したのは、普段の母を知りたかつたからです」

孝は自転車で帰つて行つた。後姿は心なしか清々したようには見えた。帰宅した孝は、信代にどのような態度で接するのである。孝と信代の人柄や考え方、これまでの二人の接し方を思うと、どちらからも、今さらワインの件を言ひ出せるとは思えないし、投書の件も、本人に確認できるわけがない。それではこれまでと全く同じ日常が続くのであろうか。孝は母親とは口をきかず目を合わさず、アルバイトにだけ出かけている。信代は孝の食事を作つてメモを置き、テニスと喫茶店で駄弁つて時間を費やしている。このような日々が、延々と続くのであろうか。

恵一は、自分には全く関係がないこととは思ひながら、このままにしておいてはいけないように思えた。なぜ他人の自分が我慢できないのかは分からない。孝と言う青年と近しくなつたためなのか、それとも、毎日のように店へ来る、信代と言う女性の本性が見えたように思えた



せいなのか。恵一には分らない。母親を信頼できない息子と、息子の気持ちに気付きながら一歩が踏み出せない母親、今の状態は、両者にとつて不幸としか言いがたいと思われた。

夫の五海道誠也氏に、すべてを話そうかとも考えた。しかし、全く面識のない人間から、突然、家族の内奥をえぐるようなことを言われてもそのまま受け取れるものではない。恐らく嫌がらせととられることであろう。恵一が話そうと思っている全ての経緯の中には、もちろん、広美の事故や静子の死も含まれている。もし悪くとられれば、脅迫と思われるかも知れない。

孝はあの日以来、家族のことを何も言ひ出さなかった。信代も同じような頻度で、店で駄弁っていた。以前と少し変わったことは、息子が世話になつていっていること、帰りに恵一に挨拶をしていた。その時でも、息子と会話のできない寂しさが、恵一にも伝わってきた。

客として来ている信代が、広美の事故に関わっていることを知つて以来、恵一は、それを信代に伝える機会を絶えず窺つ

ていた。しかし、関わっているとは言えず直接手を出したわけではない。公道で犬に散歩をさせていただけで、その時離れた所で子供の事故があったとしても、犬を連れていた者には関係はない。恵一は信代に広美の件を伝えた時、一笑に付され、理論的にはそれ以上追及できず、おめおめと引き下がるを得ない場合を恐れた。その終わり方では、却つて不快な後味だけが残る、二度と言ひ出せない惨めな状態に陥つてしまう。それはたまらないと思つた。

或る日、恵一は、信代が一人になるのを見計らつて「少し話があるので閉店後来てもらえないでしょうか」と言ふと、信代はまるで予期していたかのように承諾した。

この時、恵一は決心がついていた。孝から聞いたこと総てと孝の気持ち、それに広美と静子の全ての経緯を話すことに迷ひはなかった。このまま信代に伝えずに日延べをしていても、全てがうまく収まる方向は見えない。自分が信代と対峙することは、孝の希望で、暗に恵一から伝えて貰いたがつているとも思われる。

信代はやつて来た。昼間グループを引き連れてくる時のような存在感はなく、どれ程辛いことを言われても、全て受け入れようという様子であつた。恵一は差し出がましいことですが、前置きをして、一気に喋つた。孝の言つていた合格祝いのワインの件と、引きこもりになつた孝の気持ちと、真実を確認できない苦しみ、更には、麻薬云々という投書の件まで喋つた。信代は来た時と同じ姿勢のまま俯いて聞いていた。その信代に対して、恵一は追い打ちをかけるように続けた。

「あなたには責任も意識もないかもしれませんが、二十年ほど前、公園前の道路であなたが散歩させていた大きな黒い犬を怖がり、当時小学三年生の私の娘が、公園北口の階段から帰宅しようとして、足を踏み外して転げ落ち、意識不明のまま死にました。そして、そのショックも原因となつて、暫くして妻も病死しました」  
信代はしばらく間をおいて、小さくすみませんと言つただけで、結局、大きな反応を見せずに歸つて行つた。

二日後、孝からしばらく休みたいとい

う電話が入った。恵一は、自分がすべてを喋った結果がどうなったか、五海道家の中で、どのように展開し何処へ落ち着いたのか、全く予想できなかった。翌々日夕方孝がやって来た。突然休んだことを詫びた後、母は恵一の話聞いた翌朝早く家を出て、一時行方が分からなくなり、昨日、F県から、入水した信代が発見されたとの連絡を受け、父と一緒に早速引き取って来たと言った。

「山形さんには親子で随分お世話になりましたので、急いで報告に来ました。アルバイトのことですが、これからどのような生活になるのか、自分でも分からないので、しばらく休ませてください」

恵一には、言いたいことや聞きたいことが沢山あったが、孝はそそくさと帰って行った。普段恵一をマスターと呼んでいる孝が、山形さんと呼んだことが少し気になった。夕方、閉店後、薄暗い外灯の点在する公園への、だから坂を上った。時折夜の散歩に来ている人もいたが、今日は誰もいない。恵一はぶらんこに腰を掛けた。

四日前、信代にすべてを話したことが、

入水の引き金になったことは間違いない。しかし、もし恵一が話さなかったらどうなっていたか。信代が死ぬことはなかったが、自分からは言い出せない孝は、ますます泥沼に沈んだであろう。孝も暗に恵一が言ってくれるのを期待していたように思われる。信代の遺書はあったのか。もしあったとすれば、どこまで書かれていたのであろう。

恵一はぶらんこを揺らした。広美はベビーカーの頃からぶらんこが大好きだった。一度乗せると、喜んでいつまでも降りようとしないと、静子が嬉しそうに言っていたことがあった。恵一はぶらんこの鎖を握りしめた。二十年前、広美の小さな柔らかい手が、今、自分が握っていることを握っていたのだと思うと、恵一の胸は詰まった。

石畳の歩道に、花の千切れた数本のコスモスを握りしめて横たわった広美の様子はもちろんのこと、広美の事故については、孝に話さないでおこうと思った。同時に、孝は自分の前にはもう現れないような気がした。

完